
Please protect the future. **未来を護れ！**

蓮希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Please protect the future . 未来を護れ！

【Nコード】

N0637F

【作者名】

蓮希

【あらすじ】

偉い偉い皇女様やその護衛役やその皇女様の兄上の三人と異界からやってきちゃったりする最強な主人公が繰り出すまあ世界を護れるな所謂ファンタジー話。笑い有り涙無しシリアス微妙ほのぼの微妙みたいな感じでやっていきましょう。

一話 異界の神と人間です

多分何時もと同じ帰り道だった。いや、多分じゃなく絶対なんだけれども。

こくしやうらんぎ
國生蘭樹は心の中で叫びかけた。だけど此処で冷静さを失ってしまえばそれこそ終わりなので何とか我慢する。

そんな事を心の中で思い、現実から目を逸らさないために顔を上げ、前を見つめる。目の前には、黒い空間。

自分の手の感覚と立っているぐらいの感覚しかつかめなく歩いてみようと思いつき踏み出してもその感覚はなかった。その動く手で自分の頬を思いつきりぐにゅーんっとつねると……

駄目だ。普通に痛かった。夢じゃない。アニメじゃない。本当のこと……ぱ、パクってなんか居ないぞ。うん。決してパクっていない。

とか蘭樹が自己完結している間に目の前に眩い光が生まれた。

その光から生まれた少年　金色の髪を持つ少年は蘭樹を見てクツクツクツクと笑い出す。

蘭樹は不機嫌そうに頬をかいいた。

「よう。ランキ。」

「誰だよオイ。俺こんな知り合いいねえし？大体こんな綺麗に髪染めてる奴なんて始めてみたぜ。俺は」

態度のでかい少年に蘭樹は余裕に言い返す。すると少年はむっとした顔で言い返した。

「あ？お前だって蒼髪の癖によく言うなあ」

「俺のは地毛だ地毛。文句あるのかこの餓鬼んちよ。」

「がっ…餓鬼んちよ……失礼なっ！僕はこれでも髪様だぞ！髪様！馬鹿にするなっ！と言う風に片手に握り拳を作った少年。それを見てまた蘭樹はケツと笑った。

「髪の様？はんっ、餓鬼くせえ。変換間違えてるしよ」

「…ちつ違っ！僕は異界の門の神様なんだっ！」

急に態度が小さくなったな…とか内心思いながらくつくつくと笑い出す蘭樹。

「というより俺は餓鬼の遊びに付き合ってる暇ないんだが？」

「遊び言っなっ！」

怒鳴った少年は いや、神様か 乱暴に頭をかき、蘭樹に片手を差し出した。

「僕はエリユース。お前たちの住む地球…アースとある異世界…FWD…FANTASY WORLD DREAを繋ぐ扉を守る、神だよ。さてと、蘭樹。僕は君にFWDを助けてほしくて呼んだんだよ。…って、蘭樹？聞いてる？」

蘭樹はガシガシッと頭をかきながら胡散臭そうに目の前の少年…エリユースを見つめた。目の前のゆれる金色に揺らぐことない赤い目の綺麗な赤い目は確かに、蘭樹の住む世界では見られなかったがそれだけで異世界のやつだとは認められなかった。

もともと、適当に話を聞き逃していた蘭樹はエリユースという彼の名前しか理解できていなかったが。

「……んあ？」

「…怒ったもんなんっ！僕は怒ったっ！君の返事ぐらい聞いてやろうと思ったのにもう有無を言わずFWDに落としてやるっ！さらば蘭樹っ！さっさと地獄に…じゃなかった。FWDに落として…ひっ！？」

さっきまで動けなかった筈の蘭樹の足はまっすぐにエリユースの元へと歩き出した。顔はこれでもかってほど笑顔である。ただし、引きつった笑みなのだが……

「言ってる意味がわかんないんだが？最初から全部言ってくれるよな？」

そういつて、一步、また一步と足を進める蘭樹にエリユースは信じられないようにつぶやいた。

「何でっ！？何で神のこの僕の力を君に破られるの？いやっ、確か

に強いほうがいいからって能力高そうな奴を選んだのは確かだけど
…でも神の力を破ける人間なんて聞いたことがないぞっ！？ってあ
あああああ近づかないでくれええっ！」

どうやら蘭樹が動けなくなっただのはエリユースの力のせいだそうで
エリユースは一步、また一步後ろへと下がる。そして慌てて神にし
か使えぬ、神の力を使った。

「異転送っ！…無事を祈るからねっ！國生蘭樹っ！」

口ではそんなことを言いながらも、実はほのかにあんな恐ろしい人
間死んでしまえーっと思っていたのは此処だけの話である。

二話 活発皇女とメイド

蘭樹が落ちた先には真っ黒い闇の世界はなく、眩い光に包まれている。太陽の出ている世界だった。目の前には見たこともない素材でできた国があり、その国の門にはどうどうと『レーディアン』と書かれていた。

今落ちた蘭樹にとって、この世界がどんな所であり、この国がどういふところなのかはまったくわからなく頬をかいた。とりあえず長い蒼い髪をひとつに結びはあつとため息を着いた。

「確か……ファンタジーワールド……ドリームとか言ってなかったか？ 此処は……」

目の前の大きな国には立ち寄らずに近くを歩き始めた。町やら何やらで情報収集は基本的な基本なのだが、その前に蘭樹にはやりたいことがあった。

エリユースという神をぶつ殺すこと　　というと物騒な発言になるので、エリユースにお仕置きをするということ　　がやりたかったのだが残念ながら神はそうそうと人間の前に姿を現さない。

蘭樹がしばらく歩き出した先にはグルグルツと鳴く狼がいて蘭樹は「ん？と首をかしげた。目の前にいる狼　　ワースウルフというのだが　　を見てああつと納得した。」

蘭樹は何度かRPGのゲームをやったことがあるので、どういう状況なのかは大体理解できた。

これはモンスターで自分が攻撃されそうなのか……と冷静に解釈していると狼は飛び掛ってきた。おっと半開きだった目を軽く開いて軽々とその狼の攻撃を避けた。

「何か魔法とか使えないのか？……うりやつ、『雷よ（サンダー）』」

――
適当に思いついたのをいえば、まだ魔力のコントロールというものの存在を知らぬ蘭樹に雷が襲い掛かってきた。へっ？と蘭樹が反応

するより先にいくつも雷が狼とそのあたりの木に落ちていった。
蘭樹はというと……軽々しくそれを全部よけていた。

いまさらなのだが、神の力も破り幾つもの雷を全て避ける蘭樹はいったい何者なのだろうか……と、異世界の門から動く事のできぬエリユースは魔法を使い蘭樹の様子を見つめていた。

あのままあそこにいたら僕は殺されていたな……と静かに悲しい事を思いながら。

「……さてと、国にでもいつてみるか」

先ほどの国に行ってみたくなった蘭樹はうきうきとその国に続く道を歩き始めた。

「待てっ！」

「この国は許可証のない者は立ち入ることできぬ！」

「とつとと立ち去れ!!」

二人の兵士が持っている槍で門を交差され入ることのできなくなった蘭樹はぼりぼりと頬をかいいた。鎖国中か？みたいなことを考えるがまあRPGとはそんなものかと一人納得する。

かといえ此処を逃せば何処に町があるかなんて聞けなくなるのでせめて目の前の門番らしき兵士に話しかけた。

「じゃーさ。地図くれ地図」

「地図だと？貴様のような怪しい格好をした人物にやるものなどない！」

その言葉に軽く頬を引きつらせる蘭樹。 此処は冷静になれ。相手は兵士だ……ぶん殴ったらそれこそ終わりだ となんとか自分を落ち着けさせて自分の格好をまじまじと見る。

短パンによれよれのTシャツにスニーカー。そんなにおかしい格好か？とぼんやりと思う。

「いーれーろ。せめて地図くれ。もしくは何か補助アイテムくれ」

「ええいつ知るか!!しつこいと牢獄行きだぞ!!」

「へー。牢屋ってどんな所なんだ？やっぱり鉄格子がこう…ズラー
ーッ」と並んでるのか？」

妙なことに興味を持った蘭樹に顔を引きつらせる兵士二人。

「（なあなあこいつどんだけ田舎者なんだ！？）」

「（俺が知るかつ！？）」

ぶつぶつと二人が話しているのを見てはあーっとため息をついた。
そんな時、内側から門が開いた。

「その殿方をお城にご案内なさい」

一人のメイド服を着た女性が、そこに立っていた。爽やかな赤い髪
を靡かせて無表情で蘭樹を見つめていた。美人といえば美人なのだ
が顔も整いすぎてどうも人形にしか見えなかった。

その林檎のような真つ赤な整った唇が形をとる。

「皇女様がお占いになされました。そのものが、閉ざされし未来を
救う者だと……異世界の門の神 エリユースに導かれし者」と。今
すぐ其処の殿方を門の奥へ……後はわたくしがどうかしましょう。

「はっ、」

「承知致しましたっ！！」

その様子をぼんやりと見つめていた蘭樹はぐいぐいつと兵士二人に
背中を押されていた。

「貴方様がそうだったとは…今までのご無礼お許しください。」

「貴方様が我等の光となる方だったなんて……」

話についていけない蘭樹はそのまま門の奥へとつれてかれ…メイド
服の女性に右手を差し出された。

「わたくしは、エレティスナレディアントで御座います。このレ
ディーンに来て下さったこと感謝いたします。ランキ様」

「…？俺の名前知ってるのか？」

「はい。それも皇女様がお占いになされました。とにかく、貴方様が本当にこの世界を救ってくださる方なのか皇女様に話を通し……それが本当ならば、身勝手ながら貴方には世界を救って貰うことになりません。もし…違うというならば、無礼の代わり……この世界共有許可証を差し上げましょう。」

「ふーん。エレティスナって言いにくいんだけど」

相手の言葉を適当に流し自分の言いたい事を伝えた。

すると、エレティスナは少し困った顔でランキに言う。人形っぽい顔が少し人間に近いような感じの表情だった。

「……………そのような事は言われませんでしたから……………やはり、貴方の住む世界とわたくしたちの世界は違うのですか？」

「まあな。大体こんなでかい門なんてないし…モンスターなんか出ないしな」

「それは……………平和なのですね……………。わたくしのことは、呼びにくいのでしたらエレナと…お呼びくださいませ」

そういつて、薄く…本当に薄くだった小さく笑みを作ったエレナにおう。とランキは返事をする。

それが、これから先世話になっていくメイド兼剣士であるエレティスナ改めエレナとの出会いであった。

「お連れしました。皇女様　此方が、ランキ様でございます。」

そういつて礼をするエレナにそうかそうかと皇女は活発に笑った。ランキには皇女らしさのカケラもない、元気な少女に見えた。大きな黒い目をパチパチとさせ、その短い橙色の髪の毛はより活発な印象を与えた。

「ランキ、だったなっ！あたしは、アルテシエロイラスⅡティキⅡ

「申し訳ありません。答えかねます」

「エレナアアアアッ！！！！」

泣きかけている。完全に泣きかけている。ちょっと目が潤んでいる。そんなアロンスを見てランキは馬鹿笑いをする。

エレナは人形みたいな無表情をそつと薄い笑みにかえた。

「で……………この世界の事だが……………うつつ、うつうつ……………」

「おらおら、泣いてないで早く言ってくれ」

「あたしの守護役の癖にエレナは其処でクスクス笑ってるし……………やつてられないわー！！！！あたし皇女なだけどっ！！？」

「この世界の人間じゃねえ俺には関係ない」

「うつ、そうかもしれない……………ど。」

其処で丸め込まれるアロンス。ランキはニイッと笑った。まるで面白い玩具を見つけたかのような笑みで。

「よしっ、気に入った。アロンスッ！お前は俺のおも…ゴホンッ、仲間にしてやらあッ！」

「いや、元からそのつもりだったけどというより玩具って言おうとしたよねっ！？絶対にあたしのこと玩具って言っ気だったよなああッあッ！！」

完全に皇女には思えないその少女アロンスと無表情な女性エレナは、その日ランキの仲間となるのだった。

二話 活発皇女とメイド（後書き）

はい。長編一個も完結してないくせにまた新たに長編を書き出した蓮希です。

…って痛い痛いっそんなに石投げないでっ……

やっぱりファンタジーなら他のを更新しろよ…って思った人…ごもつともです。

とはまあ、始まってしまった作品を見守ってくださると嬉しいですよ（こんなのを二話目で話す自分もどうなのか…）

三話 呼ばれた理由と現実（リアル）の友人

ファンタジーワールドドリーム。 F W D ……

この世界にランキが呼ばれた理由は、この世界のバランスを直すことだった。

まず、この世界のバランスが崩れたのはある人間のせいだった。

人間は生きて 死ぬ。そのバランスを持たぬものがこの世界に一人…居た。

生きて、ずっと生きなければいけない運命を持ったその者は不老不死と言える存在でありその死ぬことの出来ない一人の人間のせい。この世界の全てのバランスが崩れる。

もともと、このバランスを崩したのは神だ。アロンスは、身勝手な神…そう、ポツリと呟いた。

自らが願って手に入れた身体ではないのにそれを神に責められたその人間はずっと、ある場所に隠れているようだった。

そして、それを怒った神はこの世界にモンスターを作り人間を襲わせた。

何時しかこの世界は荒れ始めた。海面は上昇し…何時しか、この人間が住む地は海に飲まれて無くなるかモンスターに殺され絶滅するか…選択肢はこの二つになってしまった。

そんななか、皇女であるアロンスが考えたことは他の人間を召喚^よぶこと。

それによってバランスが更に崩れる前にこの世界のバランスを直し、神に当たってくれば良い。

そう考えたアロンスは、心優しき…異界の門の神 エリユースに頼み込み快く返事をくれたエリユースはランキを召喚^よんだ…ということになった。

「……頼む。世界を救ってほしい。」

「ふーん。分かったー」

「軽っ！！？神もかわつてゐるんだぞっ！？」

「別にー。とりあえずやってみて駄目だったら俺帰るーでいいじゃねえか」

「……………軽すぎるよな。エレナ」

「…そうですね。」

「おら、じゃ今日は寝るって事でおらおらーっ寢床だせや」

その言葉に鬼…っとかいたアロンスはランキの怖い笑みをもらい…しかし、ランキの笑みを見て、アロンスは静かに礼を言ったのだっ
た。

「有難う」

その言葉は聞こえていなかったのか、聞こえていたのか…ランキは反応することなくエレナに用意された部屋へと向かっていった。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴ
ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴ
ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴ

広い、それはもう広いベットの上で三回目のゴロゴロに入るとコン
コンツと扉がなった。

ランキは身を起こし「ういゝ？」と気が抜ける声で返事をすれば、
そつと中に入った人物が居た。

アロンスのような橙色の長い髪をなびかせ中に入った人物には、見
覚えがあつた。

アロンスに似た顔立ちの、とてもとても偉い人が着るであろう質の
良い服。

ランキは、そんな相手をただ見つめていた。

「ん、お前亞煉か？」

「軽っ！！？何だお前、その反応軽すぎないかつ！？いや、……分
かってたが。どうせお前の事だろう……アルテシェロイラスにもそ
んな事を言われたはずだ」

「ほう。よく分かったな」

「マジかつ!？」

その目の前に居る人物は、ランキと同じ高等学校の同じクラスメイトだったはずなのだが、またそんな彼が何でこんな所に居るのかなんてランキはきにしなかった。

くしゃくしゃと自分の髪を触る亞煉ははぁーっと大きなため息をついた。

「もうちょつと驚いてくれると思ったがな」

「十分驚いてるんだが?ところで亞煉。喉渴いた。」

「知るか」

「いや、エレナに頼んだんだけどな……」

胡坐をかいたまま大きな欠伸をしたランキに亞連は高校の時と同じ笑みを浮かべた。

亞煉が何か口を開こうとした時、また扉がノックされる。

「ランキ様。遅くなって申し訳ございません。お茶になります……これは、シエルフデインス様。」

お茶の乗ったトレーを片手に入ってきたエレナは亞煉 シェルフ
デインス の顔を見るなり礼をする。

「ご苦労、エレティスナ。」

エレナの言ったシエルフデインスという言葉に、ランキは何処か聞き覚えがあったような気もした。

目の前に居る橙色のまあ多分友人である相手はニカツと笑った。エレナが去った後ランキに手を差し出す亞煉は何処か、嬉しそうだ。

「俺が、この世界にお前を呼ぶように頼んだんだ。ランキ」

「お前が?」

「ああ。もともとこの世界の皇子である俺が誰よりも先に動かなくてどうする。アルテシェロイスに全て任せられないからな」

「……皇子?」

「俺は、アルテシェロイスの兄……シエルフデインス〃アレン〃フレ―デイルだ。エリユースに頼んでお前の世界に行き、お前を探し出

した。全てはこの世界の為に……力を、貸してくれないか？ランキ」

ようやくピースがはまった。

やっと、自分の友人であるアレンはその為に日本へと来たのだ。

そして、自分をこの世界に呼ぶことを決めた。

それがどういふことなのか、どんな事で決めたのかなんてわからない。

ただ適当にだったのかもしれないし、ランキの中に眠る何かを感じたのか

兎に角、この世界を救うという使命を負わされたランキは、その手を取り軽い返事を返した。

アレンは何も考えていないようで、いろんなことを考えているランキに惹かれたのかも知れない。

兎に角全ての鍵は、エリユースが持っている。

明日から、長い、長い旅が始まるのだ。

四話 森を抜けよう！

「さあつ、逝くぞ！！！」

「「「何処へ」」」

俺の適当な言葉に突っ込む アロンス エレナ アレンの三人。

仲いいお前等とか思いながら俺はいそいそと昨日買ってきた装備をする。

腰に長剣一本。

同じく腰に短剣一本。

同じく腰に銃一本。

同じく腰にマシンガン

同じく腰に人參……

「何でだよ！！！」

「人參持っていたのなら昨日調理しましたのn」

「エレティスナは黙ってる！オイっランキっ！！何でそんなものもつて……」

「売ってたから」

「売ってたら何でも買うのか貴様はっ！！」

ふむふむ。今の調査結果から分かったことは アロンス アレン突込み 俺 エレナはボケということだな。

「何調査してるんだお前」

「おおっ心の声まで読むとはなかなかだなっ！」

「良いからさっさとその不老不死探そうぜえ……」

あ、アレンが既にぐったりしてる。しかたない。そろそろ逝ってやる事にしよう。

アロンスは俺に強制的に仲間になれ、それによってメイド兼護衛だったエレナ（ついでに今は普通の旅人の服だ）がついてくることになり、まあ妹とエレナとお前がついていくならな…とエレナに惚れてるアレンがついてくることになり……

「待てッ！なんで俺がその……アイツに惚れてるとか！？」

「むふむふ。やつぱり惚れてるんだな」

「そんなことねええええええええええつ！！！！！」

あつ、アレんがキレた。

「まずは、此処から近い街……アスラに行つて情報収集してみよう」
そのアロンスの一言で俺達は50km強はなれたアスラに向かうことになった。

……俺、ただの人間なだけどなあ。そんな50kmも簡単な顔して歩けるわけ……

まあ、俺だからあるんだけどな！…其処、オイとかいう突っ込みをするなっ！

ということでアスラとやらに向かうために森を抜けることになった。

「あつ、魔物魔物。兄上！」

「俺任せかよっ!？」

意外と良い性格してるなあ。アロンスは。

「とりあえず戦闘準備しとけっ！このへんは演歌雲と率高いぞっ！」

「何もかも間違っています。シエルフデインス様。」

「一発変換したらこうなったただけだっ！」

ああ、もつづけえ。とりあえず魔物をぶつ殺せー！って事で。

「はい。ファイアーボール火炎球」

適当に魔法をぶっ放して見た。はい。三頭居た魔物全滅っ！やるじゃん俺！。

.....

.....

.....

「何だよお前等？」

俺がその魔物の中から丸いクリスタルのようなものを取り出してほーと珍しい顔をして見ていると物凄い沈黙が襲ってきた。
何だよコイツ等？

…ところでこのクリスタルってRPGとかだと金に代えられるよない。ここでも出来るのか？

「「「強すぎ（じゃね？/です）」」」

「は？」

俺は何言ってるんだコイツらみたいな視線を向ける。何かさっきからこんな視線だ。おい、これでいいのか。

「……ランキ様。その、ランキ様の世界では、魔道士……魔法使い……精霊使いなどあったのですか？」

「うんにゃ？んなもんねえけど？」

大体友人にそんなこと聞いたらお前何言ってるんだよ阿呆って思われるに決まってるだろうが。やっぱり異世界ってあれだな。不便だな。大体魔法なんて適当に念じれば出来たしあれか？誰でも出来るわけじゃないのか？やっぱりRPG使用？

「あ…あーる、じー？……わかんないが、大体全員が全員魔法使えたら苦労しないよ」

「おい、心を読むな。」

「声に出てる。何か間抜けだな。お前」

がしがしつと髪をかいていうアレン。むっ失礼な。俺が間抜けだと言うのか？

「ああ。今現在進行型で」

何か物凄いム力つく……けどまあ良いか。
で、このクリスタルなんなんだ？

「あつジェルクリスタル」

「ジェルクリスタル？」

「この世界のお金の単位はZ^{ジェル}R。そのジェルを代えられるクリスタルだからジェルクリスタル」

ふーん。思ったとおりなんだな。と、そのクリスタルを懐にしまう。

ふと、アロンスが呟いた。

「あ、魔物」

ザシュツ

その辺から現れた魔物を適当に長剣で切り刻む。あ、ちょっとグロい。

「……………あの、ランキ様」

「？何だエレナ」

「その……………貴方の世界に剣士……………等は……………」

「あー、ないない。俺の世界ではあれだ、武器持っちゃいけねえんだよ。まあ刀ならあったけどな。」

「カタナ……………ですか。」

「この世界でカタナってないのか？」

「あるぞ？シエインベルトで売っている。最も私は短剣の方が手になじむから長剣やカタナなんか使わないがな」

シエインベルトって何処だよそれ。……………まあ別にどうでも良いんだがなっ！

「魔物」

アイスレイン

「氷雨」

「まも」

「龍斬っ！」

「ま」

「失せる」

次から次へと出てくる魔物を狩りまくって序にさっきのクリスタルを拾っておく。

後ろの三人を忘れて先ほど見た記憶の地図を頼りに森を歩いていった。

「俺達いらないんじゃない？」

「思ったぞ。今……」

「……私達の立場はなんですか。」

静かに呟く三人が居た。

四話 森を抜けよう！（後書き）

次書く前にUPしたのでストックが減りました…；；

五話 意外な真実

あれからすんなりとアスラに着いた俺達はまず一日目は宿で休み……二日目……つまり今日、情報収集することになった。

チツ、面倒くさいの……とか思ったがまあ一度引き受けたからにはきちんとやってやろうじゃねえかこの野郎！

「じゃ、二人ずつ分かれよう！」

アロンスのその一言で俺達はじゃんけんをして……決まったチームがこれだ。

俺 エレナ

アロンス アレン

のチームなんだが………アレン。そんな憎しみのこもった目で睨まないでくれ。

どんだけエレナに惚れてるんだよ。あいつ。

「では、行きましょう。ランキ様」

そういつて歩き出すエレナに適当な返事を返し俺はその隣を欠伸をしながら歩く。

「……身長、高くて良いですね」

ポツリッとエレナがこぼす。何だ行き成り……

「アルテシエロイラス様もシエルフディンス様も身長が高いというのに……何故私だけ低いのでしょうか……」

「あれだ。牛乳飲んどけ。」

その言葉にもうやってますという返事。やべ、コイツ面白いっ！

俺がクスクス笑っていると少しだけ顔を赤くするエレナ。無表情じゃなくなった途端急に可愛くなった。

とまあそんなエレナにトクンツ……なんてときめくはずがなく……（何でかって聞かれたら俺だからとしかいいようがないな）俺はまた笑った。

「そついえばこの世界では皆名前が長いのか？」

「え？」

「ほら、アロンスもアレンも長いだろ？エレナは其処まで長くないな……って此間理解したが。えーっとエレティスナ？」

「覚えてたのですね。はい。そうですね、この世界では私ぐらいの名前が普通なのではないのでしょうか。ランキ様ぐらいの長さの方も居ますし、だから名前が長い人の方が珍しいので……」

そういつて笑みを落とすエレナ。というより聞き込みしてねえな。俺が思い出してガシガシツと頭をかくものの、エレナはそれに気づいていないらしく嬉しそうに話をする。

「女王様が『童は名前の長い方が王族っぽくて良い！』と騒ぎまして……そして名づけられたのが第一皇子のシエルフディンス様で、その次に生まれたのが皇女のアルテシエロイラス様でした。そしてその一年後辺りから『ジェルフリンク……』とか、シエルフディンス様の名前を間違えまして……」

クスクスツと笑うエレナからはその女王もアロンスもアレンも大好きなんだな……というのがよく分かった。

俺は適当に相槌を打ちながら、隣を歩く。

「『誰じゃ、こんなに名前を長くしたのはっ！』と王様を困らせました。まったく、こまった人ですよ？ですから次の第三皇子はレンシエルト。皇女様はフレイルと名付けられたのです」

「へえ。困った女王もいたもんだ。……って事は四人兄弟なんだな？」

「はい。」

「じゃ、何でエレナは其処に使えるようと思ったんだ？」

その言葉にへっ？と間抜け顔をするエレナ。

「あ……私が、女王様の妹の子ですから。」

ふーん………って

「エレナも王族！？」

「あまり、大声で言わないで下さい……／＼自覚をあまり持つてないので追い出された身です。それを女王様……伯母様に拾ってもらいまして」

へえーと俺は目を見開いた。

んで、アロンスとアレンの世話役か。てか何で俺の周りに三人も王族が…てか、それで良いのか。レディーン。

「だから、お前の苗字……ファミリーネームって奴と国名が似てたのか？」

「はい。そのとおりです。よく覚えていましたね」

そういつて、クスクスツと笑うエレナ。

誰だ。エレナを無表情なんて思った奴…って、俺か。

その日、俺とエレナは聞き込みが出来なく……宿に戻ってからアロンスに怒鳴られる。

それすらも面白く笑った俺とエレナにアレンから嫉妬の目を向けられる。

これが、異世界に来て三日後の出来事だ。

五話 意外な真実（後書き）

11月14日の更新停止発言ですが5月21日の今日、復活しましたー！

少しずつですが更新復活していきますー！。

六話 夢の中での出会い（前書き）

お久しぶりです、蓮希です。何か最近全くって言っていていいほど更新してないっすね……

六話 夢の中での出会い

アロンス、アレンから聞いた話だとその不老不死野郎は此処から少し離れたウェデイズという街に居るそうだ。

……随分とあっけなく見つかりそうだな。不老不死。

ただ、ソイツは旅人としてすぐに姿を消すようだから今日来たかと思えば今日居なくなってるとか……それただの通りすがりじゃないか？

「まあ手がかりはウェデイズしかないからな。其処に行こう」

「アイアイサー」

「あ、あいあい……？」

そんな話をした俺達はその日、宿を取りまた眠ることになった。

こ……

エ……リア……何処……

目が覚めたら真っ暗だった。俺はポリポリと頬をかいてあたりを見渡した。デジャヴ？

…確かあの時はエリユースに呼ばれたんだが……。そんなことを思いながら俺は歩き出した。一步、また二歩と……。気づけばだいぶ歩を進めていたようで真っ暗な闇の景色から、明るい空が見えてきた。

チュンチュン……と小鳥の鳴く声。辺りには花畑が広がっている。

何だこれ。夢か？と頬をつねれば痛かった。現実？リアル？それともドリーム？……分らないな。

俺は欠伸をしながらその花畑を歩き出した。

「……君は、エリア……？」

ポツリツと呟く声が聞こえた。パチパチと目を瞬きすれば目の前に居る青年。

闇のような黒い髪を靡かせた、青年が居た。まだ少し幼さの残るような、でも大人っぽい表情をした青年。その目はまん丸に見開かれていた。

何だこれ。恋愛シュミレーションかなんかの恋愛イベントか？んなわけねえだろうが。

大体俺は男だ。男に迫られても興味がない。…じゃなくてだな。

「誰だ？お前」

俺は頭をかきながら聞くと青年は沈黙してふるふるっと首を横に振った。

「……違うつ……エリアに似て、エリアに似ない者……君は、誰だ？」

「名乗る時って自分からじゃねえの？」

欠伸をしながら言うとその青年は困ったように「ああ」と微笑んだ。青年というより少年という表現の方があっているきがするな…と今更ながら思った。

「俺は、イズ。イズ・イス。」

ポツリと寂しそうに呟くイズにそっかーと俺はその場を去ろうとする。

オイッて突っ込みはなしで。此処の小鳥の鳴く声と花畑がある此処は妙にむず痒い。

夢の中でこんなの見る俺って何なんだよオイ。

って事でおきてアロンスでも弄りたお……

「ちょ、待ってくれよっ！俺は名乗っただろう？というより何故に其処で去ろうとするんだ！？」

「いや、面倒くさいし」

「面倒くさいって……なんだ。俺と使う時間はそんなに……分かったよ。……エリア。現実は厳しいね」

いや、誰かエリアって…というよりお前は何者だよオイ。

「……ランキ。」

はあーと大きな溜息を吐きながら言えばパアッと顔を明るく

させるイズ。

「わ、有難うつ。俺……………エリア以外に名乗って貰うの30000年振りだっ」

……………30000?0四つ?

「what?」

「え。何語?…異国の人?」

「I from tokyo」

「あ、あい……?」

ちよつとからかいすぎたか。と思う。

大体目の前の奴頭真っ白になってるみたいだし。いや、だって30000年ぶりっていったんだぜ?コイツ。

「……あ、不老不死の野郎だ」

普通に300000って言ったらそれぐらいしか思いつかないんだが…イズは物凄く驚いた顔をしていた。

「な、何で分かったんだ!?君……心読めるの?」

「さっき300000年ぶりっていったじゃないか」

「…そっか」

何かいろいろ突っ込みどころがある奴だな。コイツ。

何だ。天然というのかコイツは。そうか。そういうことだな。

「ところで此処何処だ?」

「あれ?今更?」

イズの話に寄ると此処はイズの精神世界だそうだ。不老不死の彼には不思議な力が宿っているらしく強く願えばイズの願った人がその精神世界に現れるようだ。

ある日(といっても何年も前なんだろうな。きっと)FWDで出会

った少女ともう一度会いたくなり、その少女を此処に呼んだのが始まりだそうだ。

それが、エリアという少女だったらいい。俺には何もわからないがな。

何年もの時がたち、ある日突然……何時も精神世界で話していた少女 エリアを呼ぶことが出来なくなった。決して力を失ったわけではないのに。(つまりそれはエリアが死んだんじゃないのか?) 何度も何度も呼んでも現れることのなかった少女。

そして今日も少女を呼ぼうとし……するとエリアとかそんな奴の事を知らない俺が現れたらしい。……変なの。

ようはあれだろ? イズがエリアに会いたくて呼んだら俺が来たんだろ? こんな説明して読者の皆様が分かるとは思わないしな。

「ふうん。で? 何で俺が来たか分からないのか?」

「多分ランキが来たのは、エリアとランキが同じ波長だから……でも、同じ波長を持つものなんて、世界に居てはいけないのに」

波長……? 何だ……それ? まあ後でアレンに聞いてみればいいのか(アロンスは結構天然だったりするから知らないと思うしな)

「所で、さ。俺はお前を探してるんだ」

その言葉にへ? と首を傾げるイズ。

「俺を?」

「ああ。で、ウェデイズに居るのか? お前」

「俺? アロルドに居るけど?」

「……アロルド?」

何処の町だそれ……まあ良い。後でアレンに聞いてみれば良いんだな。

「うん。その通り……ふあああ……俺眠くなっちゃった。君とあってよかったよ。また呼ぶからね」

「え? あ? つてオイッ! !?」

欠伸をしたイズはニコツと笑って花畑に倒れて眠りだした。それと同時に俺の意識は失われていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0637f/>

Please protect the future. 未来を護れ！

2010年11月13日02時44分発行